

ニュースレター

No.28

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

所長就任挨拶 2011年度の研究所活動 所長 帆苅 猛

関東学院大学「キリスト教と文化研究所」は、2001年10月13日に発足しました。したがって、本年10月で10周年を迎えます。

設立以来、本研究所では幅広いテーマを取り上げて研究グループを結成して研究活動を続けてきました。研究グループのテーマは、「キリスト教と日本の精神風土」、「いのちを考える」、「奉仕・ボランティア教育」、「国際理解とボランティア」「バプテスト」、「坂田祐」、「依存症とキリスト教」と多岐にわたりますが、しかしいずれも、本学の建学の精神と深くかかわっております。

研究グループが徐々に増えて、各研究グループで研究活動に使用できる予算が厳しくなってきたこともあり、村椿前所長の提案により、今年度より、特定のグループに研究活動費を集中して、成果を挙げていただくことになりました。今年度は「坂田祐」と「国際理解とボランティア」の各研究が選ばれております。

研究グループが増え、研究活動がますます盛んに行われるようになったことは研究所にとって喜ばしいことであり、今後ますます盛んになっていくことは望ましいことですが、他方、研究所全体で特定の研究テーマを掲げて集中的に研究に取り組み、成果を上げていくことも必要のように思われます。とく

に本学の建学の根幹にかかわるような問題は研究所全体で取り組むのがふさわしいと思います。これがどのような形で展開できるか、その可能性を所員・研究員の皆さんの知恵をお借りしながら模索していきたいと考えています。

本研究所の活動は、所員・研究員の研究が主要な業務となっています。もちろん、研究所である以上、研究活動が主であるのは当然のことです。ただ、大学の研究機関である以上、研究活動なり、研究の成果なりが学生に還元されることも大切のように思われます。もちろん、従来より、研究会・講演会に学生たちを参加させる試みが行われてきましたが、今後、より積極的に取り組むことが重要ではないかと考えています。その中で、学生の本学の建学の精神や自校史についての学びにも協力できるのではないかと思います。さらには、本研究所の研究成果が大学の枠を越えて社会にも貢献できるものとなれば、望外の喜びです。



2011年度各プロジェクト・グループ活動計画

「依存症とキリスト教」研究グループ

代表：安田 八十五

本グループの目的は、「依存症」および「依存症社会」の構造と特質をキリスト教の視点から分析し、解決のための方法と手段を探ることである。

主な研究課題としては、以下のテーマを計画している。

- ①依存症および依存症社会に関する総合的調査研究
- ②依存症と依存症社会に関するキリスト教との関係の基礎的調査研究
- ③依存症からの回復のための12ステップ方式自助グループの実践と実践的研究
- ④最近の大学生等に起こっている依存症問題に関する研究
- ⑤出版計画の準備作業

「いのちを考える」研究グループ

代表：松田 和憲

本グループでは現在、関東学院内を対象とした意識調査を進めている。

本年度は以下の展開を課題としている。

- ①インタビュー調査のまとめ：「大学生の『いのち』に対する理解について」について、2010年度に収集したインタビューデータの分析を行い、まとめを行う。
- ②研究会：グループ内外から「いのち」に関連する研究を募り、発表を行ってもらい、「いのち」に関する理解の深化を図る。
- ③東日本大震災にまつわる課題の検討：「いのち」という観点に即した課題を検討する。

「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ

代表：富岡 幸一郎

本グループでは、キリスト教の日本における受容とその変遷について、様々な角度から検証する。

21世紀に入り、宗教原理主義などの問題が政治的・文化的課題となっているが、一神教とはそもそも何なのかという問い直しが求められている。多神教的・汎神論的なものと一神教を対立的に考える志向が日本には多いが、そうした対立図式を超えた視点の形成こそが求められていると思われる。

こうしたテーマに関わる研究会・講演会・シンポジウム等を企画していきたい。

「バプテスト」研究グループ

代表：村椿 真理

本グループは、「バプテスト研究プロジェクト」の流れを汲み、関東学院大学の伝統であるバプテスト派に関する研究を進める。

本年度は「バプテストと教育」を共通テーマとして、以下の活動を進めることを予定している。

- ①定例研究会の開催：各自研究テーマを登録し、定例会発表を行う。
- ②論文執筆：2013年度に「研究所叢書」として論文集を刊行、出版することを目指す。
- ③シンポジウム等：今年度実現出来るか分からないが、今後学外講師を招き、シンポジウムもしくは研究会を開催することも予定し、計画していく。

「奉仕・ボランティア教育」研究グループ

代表：細谷 早里

本グループは、以下の課題について活動を進めることを予定している。

- ①関東学院大学の建学の精神の研究（キリスト教的理念、関東学院大学の歴史とその前史の研究、関東学院の指導者たちの教育思想の研究、関東学院大学・その併設学校に見られる奉仕活動の紹介と分析を含む）
- ②奉仕・ボランティア教育の理念と米国における事例
- ③日本における若者を中心とした地域奉仕ボランティア文献・事例の一覧と関連報道、意識調査
- ④キリスト教精神に基づく愛の業とその理念記述

「国際理解とボランティア」研究プロジェクト

代表：リサ・G・ボンド

本年度は、「中国・雲南省におけるプロテスタント・キリスト教～西双版纳（シーサンパンナ）少数民族居住区における教団の歴史的変遷と現状～」を主たる課題として、以下の活動を進める。

- ①研究調査活動：雲南省とビルマの国境地帯、とりわけシーサンパンナ・タイ族自治州における少数民族の生活実態を観察することと、また現地の教会と牧者、教会員に対する聞き取り調査を行う予定である。
- ②学内外の研究者によるセミナーもしくはシンポジウムの開催。
- ③月例研究会および研究発表

「坂田祐」研究プロジェクト

代表：帆刈 猛

本プロジェクトは、坂田祐の活動についての研究・検証を進めている。

本年度も以下の活動を予定している。

- ①研究会の開催および坂田祐関係資料の収集・保管
- ②坂田日記研究：従来と同様に、坂田祐の日記を通して、学院史、坂田の活動について研究を進める。
- ③坂田日記のデジタル・データ化および出版化
- ④「日向内記」研究：坂田の祖父にあたる日向内記について、昨年度開催セミナーをまとめ、さらに研究を進め、今年度所報に掲載する。

研究会等の予定は、随時ホームページに掲載していますので、ご参照下さい。

<http://kgujesus.kanto-gakuin.ac.jp/>

「国境を越えて行きかう人・物・金」

開発教育の現場から日本人NPOの報告

日本の農村にも似た田園風景が続く、タイの山中。ビルマと国境で接するこの地域は、タイでも有数の農耕地であり、今なお、少数民族たちが焼畑の火を野に放つ。だが、開発の波と法の裁きが彼らの生活を脅かす。国境を越えて人・物・金が、遠く日本にまで行きかうという。しかし今、特権階級や企業が支配すると言われている、この北部山岳地帯にも、変化の風が吹きはじめた。悲劇の舞台裏で出番を待つ役者のように、日本人開発教育NPOスタッフは、何世代にもわたって繰り返し広げられてきた、過酷なドラマの結末を見守る。

2010年10月30日 関東学院大学関内メディアセンター
司 会：齋藤百合子（明治学院大学 国際学部 准教授）
パネリスト：木村 茂 NPO法人「Link・森と水と人をつなぐ会」会長
百瀬圭吾 NGO「てのひら～人身売買に立ち向かう会」代表理事

国境に近い北部最大の都市チェンマイ。ここが彼らの活動拠点だ。

付近の山中では、長い間開発と森林保護という矛盾のもとに、企業が利権と経済を牛耳り、莫大な賄賂が悪徳役人の懐に流れ込んでいた。代償として山の森は次々に奪われ、消えていった。生活の場を失った村人は現金収入を求めて街に出る。言葉や習慣の違う彼らを待っているのは差別と搾取だ。少女買春を斡旋するシンジケートに売られる少女が後を絶たない。この現実を見て、木村茂はNPO法人「Link・森と水と人をつなぐ会」を立ち上げた。彼の呼びかけに村の人々は立ち上がり、役人・企業・マフィアがはびこる土壌を崩し、村人によって豊かな森を再生する運動に、取り組みはじめた。タイの現状について木村会長は次のように述べた。

私たちLinkは、タイの北部で村人たちが森を守る活動を支援しています。開発政策の実践によって疲弊・荒廃してしまうタイ族や少数民族の村は沢山あり、その中で再生に向かって立ち上がろうとする村を応援しています。

社会問題というのは起こってしまったから問題なのですけれども、起こらずに済むに超したことはないわけです。売られてしまった子どもたちを助けるのは当然です。ただ、売られてから助けられるのではなく、売られずに済むようにはできないかということですね。人身売買というのは社会の病気だと思えますけれども、病気であれば治療だけではなくて予防もしていかねばならないと思います。私たちは、予防型の活動をしているともいえると思います。

バンコクはタイの首都ですが、日本人が2万人以上住んでいて、大工業地帯もあるところです。工業国として急成長を遂げつつある国ですが、このタイの心臓部に水を供給しているのはすべて、北タイから流れ出す川です。北タイはとても美しいところですが、多くの少数民族が伝統的な生活を送っています。焼畑農業を行う村もあるために森林破壊の元凶といわれますけれども、自分たちが生活できなくなるようなことを農民がするでしょうか。自然を敬い、知り尽くした上で、自然適合的で持続的な生活をしているのが、この地の農家の人たちです。

しかし、森は非常に荒れています。外貨収入を得るために多くの木が伐られてきたということもいえますが、いまや大きな木は残っていません。国有林であっても、力のある企業が勝手に木を伐ってしまうことがあります。森が伐り開かれて、より奥地まで開発が進むようになっていきます。これによって土地を追われた農民が、山のままで焼畑を進めざるを得なくなることもあります。

私たちは、村人たちが森を守ろうとするのを手伝っています。村の周りに共有林という森を設定するのを支援します。そこでは元来村人が自然を守りながら、生活に必要な資源や食材を手に入れていました。ところが開発の名のもとに企業による伐採が過度に進み、今や多くの山から森が失われてしまいました。慌てた政府は森林を保護する法律を施行し、村人から森の利用権を取り上げてしまいました。しかし最近、村人たちが自身が村周辺の森を従来通りに利用したり保全したりできるよう、森林局と交渉して、国有林として取り上げられた森の利用権

チェンマイ県ティワタ村の教会で祈りを捧げる少数民族カレン族の少年。
彼らはタイ北部の少数民族では最大の人数を持ち、その多くはキリスト教に改宗した。
差別や搾取にあい、貧困に喘ぐ者も多く、識字率も低い。

を取り戻そうという動きがあります。私たちは村人たちが自分たちで管理を希望する森の範囲を示す地図を、村人と共に作っています。村人主体の活動の根拠となる森の地図を作る作業を支援しているのです。

現在タイの国土に占める森林の割合は25%しかありません。日本は67%が森です。東南アジアのほとんどの国で、森は20~30%しかありません。木はモノとして国境を越え、売買されます。最大の消費国は日本です。日本は世界一、二の木材輸入国です。消費する木材のうち約40%が紙にされますが、一年間で一人あたり250kgもの紙を使っています。そのような私たちの生活というのが問題を抱えていないのか、これは急いで、真剣に考えなくてはいけないかと思っています。

森が守られれば必ずしも子どもが売られないというわけではないのですが、借金を背負って困窮している人ほど農地を失い、森への依存度が高まる傾向にあります。その森の利用が、近年の保護政策によって制限されている。現行の法律をそのまま適用すると、森から野生の木の実一つ持ち出しただけでも違法とされてしまいます。それに対してそれぞれの地域の森の保全は、一部の利用も認めた上で、住民が主体となって行えるようにした方が良いのではないかと考え方が、やっと広がってきました。とかく問題となる住民組織の強化支援も併せ、現実的な森林保全が広く実現するよう、一層努力していきたいと思っています。

一方パネラーとして同席した百瀬圭吾は人身売買に立ち向かうNGOを日本で運営している。彼は人身売買と消えゆく森林との関係を次のように指摘した。

私は人身売買で日本に連れてこられた成人女性たちが入る民間の女性のシェルターや、虐待されて人身売買のような被害にあった子どものシェルターに関わってきました。そこにはタイから連れて来られた女性もいます。

12秒数えます。今、世界で一人、人身売買に遭いました。一年間で270万人。これが人身売買の被害者の国連の発表している2009年度の総数です。自分には関係ないのかというと、例えば児童労働がありますが、チョコレート、サッカーボール、コーヒー、バナナ、ジュース、Tシャツの素材になるコットン。こういうものは、子供売買して、子供を毎日働かせて作られています。2009年2月の警察庁の広報資料ですが、18歳以下の子供を保護しただけで724人、毎日2人、日本で子供たちが人身売買されています。

それでは、私たちに何ができるのだろうか。ある方に、人身売買に遭った人たちが感じる痛みだとか、辛さだとか、それは自分の感じられるものとは違うかもしれないけれど、普遍的な悲しみとか痛みとかは、みんなあるわけだから、そういう気持ちが変わるところを通して自分たちのことになると良いのに、と言われたのですね。

その「自分たちのこと」というのがキーだなと、ずっと思っています。「力の支配の自覚」ということが、最近気になっています。私が支援者として関わらせていただいた当事者や、自身も、みんなが生きづらくさせられているのですよね。今の社会の構造によって、みんな何かの支配をされて、生きづらくさせられていると感じることがあるのですね。

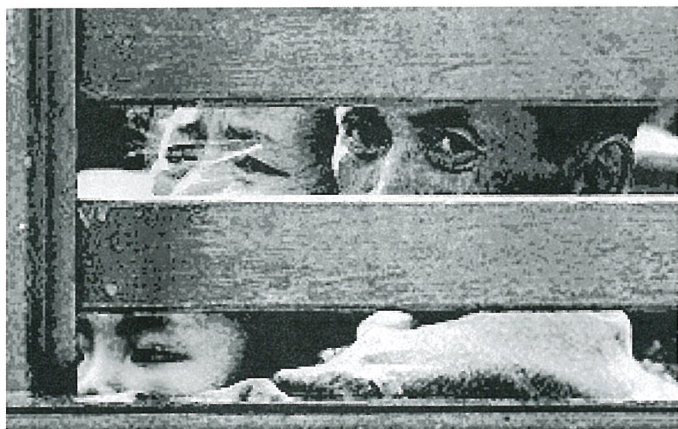
人身売買という問題は、問題を問題としてとらえてしまうことによって、それがどんどん自分と違うものになってしまうのではないかなと思っています。つまり、自分自身に本当に引きつけて考えることが重要だと思うのです。私たち一人一人も何かの力によって生きづらくさせられているし、支配されているという感覚を持つ必要があるのではないかと。そんなことを思いながら活動しています。

男だから暴力を振るう側なのか、搾取する側なのか、女性だから暴力の被害にあう側なのか、あるいは奪われる側なのか、日本に生まれたから奪う側なのか、あるいは子どもだから暴力を振るわれるのかという、そういう垣根を持たないことです。たまたま、自分はそういう暴力の被害にあわなかったけれども、ふっと間違ったら、自分も殴られて育った子供だったろうと思います。ゆえに、何か自分の当事者性というか、そういうものが自分の中にあれば、シェルターに来る女性とか子供さんとかに自分の思いが響くのですね。

百瀬の話 最後に、司会者の齋藤は次のようにまとめ、セミナーを締めくくった。

本日のシンポジウム「国境を越えて行きかう人・物・金」の中では、「物」という部分で、私たちの生活に密着したものが熱帯の森から賄われていることが明らかにされ、その結果、「人」が売買され、裏では「金」が動いている、現実のタイの森では何が起きているのか、を木村さんから伺いました。そして百瀬さんからは、日本の私たちは「奪ってしまう」という加害者的な気持ちだけで良いのだろうか、私たちの社会を見つめなおしてみよう、というお話を伺いました。

木村さんの言われた、「売られてから救うのが良いのか、売られないように努力するのが良いのか」そして百瀬さんの言われた、「自分たちのこと」というのが、キーポイントだと思います。人身売買というと、女性の性的搾取というイメージが大きいのですが、児童労働、労働搾取、臓器売買も人身売買にあたります。それがタイでの森林破壊に深い関係を持ち、尚且つ日本も様々な意味でその当事者であることに気づかされました。時間の関係上、語りつくすことはできませんでしたが、今後大いに議論を重ねたいと思います。来場の皆さん、パネラーの皆さん、そしてスタッフの皆さん、本日はありがとうございました。



The space of the *Member*

所員 文学部 平坂文男

今日、交通機関やインターネット等の情報通信網の発達により世界は益々狭くなり、国境の垣根すらもはや無意味と感じられます。その一方で、国家や民族間の言語や文化の違いは厳然として存在し、そのため、相互のコミュニケーションのために互いの言語を、あるいは広く世界で用いられている言語、特に英語を学ぶことが重要です。

我が国でも、英語の学習意欲は非常に高くなっています。英語等の外国語の学びや運用がコミュニケーションに重要なのは確かです。しかし一方で、国家や民族間の文化の違いには、あまり目が向けられていないことも事実です。お互いの文化の違いへの理解や尊重がなければ、自らの立場ばかりを主張することになり、真の意味でのコミュニケーションが行われず、時として誤解をも招き、取り返しのつかない事態へと発展しかねません。そのため、言語だけでなく文化をも学び、十分に理解して尊重することが重要です。

一般に、文化と人々の価値観の形成において、宗教は極めて重要な役割を果たしています。特にキリスト教のような世界規模の宗教と、それにより形成される種々の文化への理解は、我々がこの世界の一員として生きてゆく上で、最重要課題の一つです。その意味でも、本学の「キリスト教と文化研究所」の存在意義は大きなものであり、本年度よりその所員として加えて頂いたことに感謝申し上げる次第です。

研究員 人間環境学部 栄本和子

本年度より「キリスト教と日本の精神風土」のプロジェクトに研究員として参加させていただくことになりました栄本(えいもと)和子と申します。

近代英米演劇及び英語教育について研究しています。演劇の分野では、アメリカにおける近代演劇の祖であり、ノーベル賞受賞劇作家でもあるユージン・オニール(1888-1953)の作品に潜むキリスト教的要素と仏教的要素を中心に研究しています。アイルランド移民で敬虔なカトリック信者の両親の影響を強く受けて育ったオニールの信じるキリスト教の骨子はケルト的要素を内包するアイルランドのカトリックです。『ケルトと日本』(鎌田東二、鶴岡真弓編著)は、ケルト思想におけるアニミズム的要素と日本仏教におけるアニミズム的要素の類似を指摘しています。このあたりから、キリスト教と仏教の比較研究を進めていけないものかと思っています。これまではオニール作品に流れるキリスト教や仏教の精神を理解するために、聖書、仏教経典、関連書物などを通して独自に学んできましたが、今後はこの研究所で、諸先生方にご指導いただきながら、キリスト教(プロテスタント、カトリック)と仏教について、さらに理解を深めていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

横浜市金沢区六浦東1-50-1

電話：045-786-7873(研究所直通 月～金曜 10:00～16:00まで)

FAX：045-786-7806(研究所直通 24時間受付)

発行者：帆苅 猛

Director: Takeshi Hokari